

- 6) 新村 巖 (1974) トサカノリの胞子発生とその生長. 藻類, **22**: 77—82.
- 7) 新村 巖 (1974) トサカノリ生育の季節的消長と胞子放出期. 藻類, **22**: 124—129.
- 8) DOTY, M.S. (1973) Farming the red seaweed, *Eucheuma*, for carrageenans. *Micronesica*, **9**: 59—73.
- 9) 猪野俊平・太田三木夫 (1954) ホソバミリンの胞子発生について. 植維, **67**: 87—90.

□ John D. DODGE: **The Fine Structure of Algal Cells** i-xii+261 pp., 写真156葉, 挿図35, 図表8, Academic Press London and New York. 1973. (価格. 邦貨にして約5,000円) 本文は14章からなり, そのうち9章をさいて藻類細胞器官(細胞表層構造・鞭毛・葉緑体・ピレノイド・眼点等)について各論的に詳しく総説している。終章では微細構造を基にした藻類群の系統関係についての著者の見解が簡潔に述べられている。使用されている写真156葉のうち大半は切片法によるTEM像である。そのうちわけは著者および彼の共同研究者によって既に発表されているもの44葉, 他の研究者の論文からの引用23葉, そして本書で初めて発表された89葉の秀れた原図である。これは毎年秀れた電顕写真とともに数多くの論文を発表している DODGE 博士にして可能なことであり本書の特色をなすものである。

1950年代の初頭から生物学分野への電子顕微鏡技法の利用が始まり今日に到っているが, その歴史はそのまま藻類学の分野にも当てはまる。藻類を材料に使った電顕の研究の論文は50年代の終わりには100編前後発表されていたに過ぎないが, 60年代後半になるとその数は急速に増加し, 現在では筆者の推計でも数千編におよんでいる。したがって我々が全ての情報に精通することが不可能に近くなりつつある。そのような時期に733編の文献(1973年までのものが引用されている)を駆使して書かれた本書が世に出たことは類書が無いだけに一層有意義である。藻類学におけるこの方面に進もうとする者, この方面の知識を広く得ようとする者にとって好適な入門書としても役立つばかりでなく, 藻類学に広く関心を持つ者の座右に是非一冊置かれてよい本である。文章がわかり易い英語で書かれていることも本書の特色である。

(堀 輝 三)

マダジア、ペンテンモ、ユナ、ハネソゾ、ハネグサ、ケハネグサ、コザネモ、ホソコザネモ、イソムラサキ、ヒヨクソウなど。

ここでの打ちあげ海藻は種類数の上でもまた量の上でも約80%以上は紅藻類で占められる。ここには美しいもの、あるいはいわゆる珍品希品と称される種類も実に多い。筆者はここでフジノハツタ、イチメガサ、オオノアナメ、キヌダルス、カエルデグサなどをしばしば採集した。またヤツデガタサカモドキ、ヤレウスバノリ、ハスジギヌなどは、2～7月には極く普通に採集できるといってよい。

交通 外房線で東京駅より大原まで特急で1時間半、快速で2時間である。駅前に大原町観光案内図がある。線路沿いに隣駅浪花方向に約100m進み、線路を直角に横切つてどこまでも進むと大原漁港に至る。港の手前約200mのところの左側に郵便ポストがあり、右手に海の見えるところがある。そこが丹ケ浦である。丹ケ浦まで大原駅より徒歩で約20分、タクシーでは約5分である。車では国道128号線を南下し、大原漁港入口で左折するとよい。東京地方からは手頃な日帰りコースといえる。

□ W.D.P. STEWART ed.: **Algal Physiology and Biochemistry**. i-xi+989 pp., Botanical Monographs, Vol. 10, Blackwell Scientific Publications, London. 1974. £15.50 (邦貨で購入すると約13,000円)

本書は同出版社の植物学モノグラフ10巻として出版されたもので、先きにて“Physiology and Biochemistry of Algae” (R. A. LEWIN 編, Academic Press 社, 1962) の続編ともみなすべきものであり、その題目で明かのように、藻類全般の生理生化学の各専門別総説集である。後者が55章3付章(939頁)から成るのに反して、前者は32章1付章(989頁)として、章の数が減らされているだけに、かなり後者には見られない厚い内容の章もあり、全体的には生化学的内容が多くなっている。やはり最近になって、藻類学の分野にも近代生物学の進展方向が浸潤して来たことが窺われる。内容を大別すると、細胞壁関係や貯蔵性多糖を包含した炭水化物、ステロイドを含めた脂質、タンパク代謝に関連付けた核酸生化学、色素、明暗両反応を含めた光合成、明暗両呼吸、窒素およびリン酸、珪酸、石灰などの無機塩代謝、ビタミンやホルモンの影響も検討したいわゆる生長生理学、増殖、運動、同調培養などとなる。付章として、編者 STEWART の分類学所見がある。

このように、本書の内容は多彩であり、それだけに“藻類に興味をもつあらゆる学徒のための良書である”という推薦の言葉を惜しまない。事実、文献なども一般的にみてかなり詳しく引用されており、日本語のこの種の本の出版を望んでいた筆者にとっては、将にしてやられた感さえある。

(西 沢 一 俊)